

多部制高校の現状と課題並びに改革の展望

ー 生徒の適応感を高め、社会的自立を促す指導 ー

学校力開発分野(14220914) 小 関 重 紀

多部制高校には、様々な入学動機や学習歴を持つ生徒が在籍している。本研究は二つの全国調査の結果を分析することで、その現状と課題を明らかにする。さらに、先進校訪問や教職専門実習を通じたフィールドワークによって、具体的な指導方法を調査する。そして、現任校において課題解決のための実践を行い、その結果を省察することによって、現任校を中心とした多部制高校の改革の展望を考察する。

[キーワード] 多部制高校, 多様な生徒への対応, 総合的な学習の時間, SST, カリキュラム改革

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在および研究の背景

多部制高校とは、午前部・午後部・夜間部など特定の時間帯で授業を行う課程を複数置くことにより、生徒の生活パターン等に合わせた科目の履修が可能となる定時制高校のことである。元来、定時制高校とは勤務に従事するなどの理由で全日制高校に進めない青少年に対して、高校教育を受ける機会を与えるために設置されたものである。

しかし、近年勤労青少年は減少し、全日制高校から転・編入学する者や過去に高校教育を受けることができなかった者など、様々な入学動機や学習歴を持つ者が増えている。このため、文部省(現・文部科学省)は、1988年単位制高等学校教育規定を省令公布して定時制課程に単位制高校を設置できるようにし、さらに学校教育法を改めて修業年限を4年以上から3年以上とすることで、定時制高校の履修形態の多様化と弾力化を図った¹⁾。

こうした背景の下、定時制高校の15%を占めるようになったのが多部制高校である。多部制高校においては、例えば、午前部に所属する生徒が午後部の授業を選択することによって、授業選択の幅が広がるだけでなく多くの単位を修得することができるようになり、3年間で卒業が可能となる。

全国高等学校定時制通信制教育振興会²⁾(以下定通振興会と称す)(1994)は、単位制高校となることによって、個に応じた学習が可能となり、自由な雰囲気学校生活を送ることができるほか、前籍校での修得単位の累積加算や留年がないなどの特色を持てるとして評価している。さらに定時制

高校に対して、これらの特色を生かして生徒や地域のニーズに応えられるよう魅力ある学校へと変容することを求めている。

現任校の山形県立J高校は、県内唯一の多部制高校として1997年に開校した。多様な学習ニーズや学習歴を持つ生徒が入学しており、彼らへの教育機会の提供に一定の役割を果たしている。その一方で、不登校経験者の入学が多く、新入生を中心に多くの不登校生徒や退学者を出している。また、発達障害や学習障害を抱えるなど、何らかの支援を必要とする生徒も多い。欠席が多い、対人スキルが低いなどの理由で、進路が決まらないまま卒業していく生徒が20%程度いる。生徒の適応感を高め、社会的自立を促す指導体制を確立していくことについては、道半ばの状態である。

筆者は現任校に7年間勤務し、その間に多くの困惑する状況に直面してきた。なかでも困惑を極めたのが授業の指導法である。授業中、指名されても沈黙するかわからないと答える生徒が多く、そもそも指名されること自体を苦痛に感じる生徒もいる。そのため、指導法は教員が一方的に話をする講義型に頼りがちであった。その結果、生徒は安心して授業に参加し真剣に授業を聞いているように見える一方で、受け身の学習態度に終始し、試験で得点を取れない者が多く、学力向上に課題があった。授業アンケートを取ってみると、筆者の授業に対して多くの生徒が概ね満足と答えているものの、自分の意見を述べにくいと感じている割合が相対的に高くなっている。講義型の授業に対して、何らかの不満を持っている生徒も一定数

いることが窺える。また、生徒のなかには進学校を経験した者もいる。彼らが授業内容に物足りなさを感じていることは、想像に難くない。

ホームルーム活動や行事においても、困惑することがあった。中核となる生徒が少ないうえに人と接することを苦手とする生徒が多いため、生徒に任せておいては話し合いや協力がまったく進まないのである。そうかといってリーダーを育成しようにも、リーダーを経験してきた生徒が少なく人前に立つことを嫌がる生徒が多いため、その候補者を見つけることも簡単なことではない。

このような困惑は筆者一人、あるいは教員だけが感じているものではない。現任校で行っている卒業予定者へのアンケート調査³⁾によると、授業の教え方がわかりやすすくない、生徒同士で助け合う雰囲気に課題がある、不明箇所の質問をしていない、などの項目で、肯定する回答が例年他の項目に比べて高くなっており、生徒自身も感じていることである。彼らにどのような支援や指導をしたらよいのか、その指導方法をめぐって教員間で問題意識を共有することも多い。しかし、現実にはなかなか適切な解決方法を見出せないでいる。どのような指導をしたらよいのか手探り状態であることに加え、各部によって在籍する生徒の抱えている困難が少しずつ異なり、教員の意思統一を阻んでいるのである。さらに、教員の勤務時間が分かれているうえに放課後がないため、打ち合わせの時間を確保することも簡単ではない。同僚との協力関係が築きにくいのである。

(2) 研究の目的と方法

以上の課題認識に基づき、本研究の目的は次の3点となる。まず、多部制高校の現状と課題を明らかにし、個々の生徒が必要としている支援内容を探ることである。次に、その指導の在り方を提示し、現任校における課題解決の方略を探り実践していくことである。最後に、現任校を中心とした多部制高校の改革の展望を示すことである。

本研究では次の三つの方法を用いる。一つ目は、定時制高校に関する二つの調査報告書を分析することによって、多部制高校の現状と課題を明らかにし、生徒がどのような支援を必要としているのかを考察することである。二つ目は、先進校訪問や教職専門実習を通したフィールドワークによって、具体的にどのような指導が可能なのかを探ることである。三つ目は、現任校において課題解決

のための実践を行い、その結果を省察していくことである。

2 先行研究の検討

(1) 調査報告書の分析

2011年文部科学省は、高等学校定時制・通信制課程の在り方に関する調査研究を定通振興会と三菱総合研究所(以下三菱総研と称す)に委託して行った。調査方法は、両者とも全国すべての定時制・通信制高校に対するアンケート調査である。両者とも管理職が回答しているが、定通振興会の生徒の意識については生徒が回答している。

定通振興会(2012)は、定時制高校の現状と生徒の実態について調査した。それによれば、

- ・養護教諭、スクールカウンセラー(以下SCと称す)、スクールソーシャルワーカー(以下SSWと称す)の配置率や常勤勤務頻度が低い
 - ・不登校を経験している生徒が多い
 - ・経済的に困窮している家庭の生徒が多い
 - ・資格取得につながる授業を望む声が多い一方、家庭学習をしない生徒が多い
 - ・学校生活が楽しいと答えた生徒は8割以上
- などとなっている。

以上の点から、学校組織については、養護教諭、SC、SSWの配置や常勤勤務頻度向上が課題である。学習については、学習内容の精選や指導法の工夫をこらし、生徒のニーズを念頭に置いた学習指導法に努める必要がある。家庭学習については、学習習慣以前の自ら学ぼうとする学習姿勢に問題がある。学校が楽しいか否かについては、楽しい生徒は学校やクラス、部活動に居場所を見出しており、楽しくない生徒は授業や人間関係になじめていないと考えられる、と指摘している。

三菱総研(2012)は、多部制の有無別に集計結果を比較した。それによれば、多部制高校は多部制を導入していない定時制高校に比べて、

- ・不登校経験のある生徒、外国籍の生徒、特別な支援を必要とする生徒の在籍割合が高い
- ・進路は就職割合が低く、進学割合が高い
- ・多様な生徒への対応のため、授業における少人数指導、生徒へのカウンセリング、キャリア教育を重視している

という結果が出ている。そこから、多部制高校には多様な生徒が在籍し、特に不登校経験者の割合が高くなっている。卒業後の進路にも違いが見ら

れる。多様な生徒への対応として、一人一人の状況に応じた教育の実現等が、教育上の課題として認識されている、と指摘している。

(2) 先進校訪問での成果 I

2014 年度、筆者は文部科学省の研究指定校になった新潟県の三つの定時制高校を調査した。この三校が行っている取り組みの共通の特色としては、

- ・ 35 人学級で二人担任制
- ・ 単位制高校活性化指導員の配置
- ・ ユニバーサルデザインの視点の導入
- ・ ソーシャルスキルトレーニング(以下 SST と称す)の指導の推進
- ・ 職員研修の充実
- ・ 生徒情報の収集・共有方法の工夫
- ・ 学び直し、少人数授業、習熟度別授業、チームティーチングなどの学習支援方法の導入
- ・ 校外での学習成果を含む多様な単位認定の実施などが挙げられる⁴⁾。

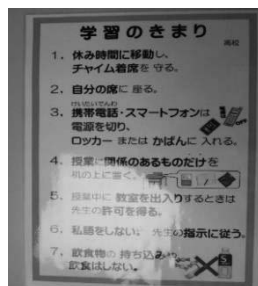


図 1. ユニバーサルデザインの視点の導入例
(視察した新潟県立M高校で使用されているもの)

(3) 先進校訪問での成果 II

2015 年度、筆者は SSW を導入している大阪府の二つの定時制高校を視察した。両校とも SSW は非常勤で複数校を担当しており、SC も同様の勤務で配置されている。

K 市立 K 高校は、夜間定時制の高校である。SC が生徒に直接働きかける業務を行うのに対して、SSW は家庭など生徒を取り巻く環境に働きかける業務を行っている。SSW は外部機関との連携を取りやすく、保護者への働きかけでも教員が行うときよりも有効である場合があるという。

この学校では、授業開始前に学び直しの学習時間を設け、学校設定科目「基礎学力講座」として単位認定をしている。1 年次に単位を修得できない場合、2 年次の夏季休業中に集中講義で単位を修得することができる。職員室の隣にある学友室は、遅刻した生徒への指導や質問に来た生徒への学習指導など臨機応変に使用することができ、小規模

校の良さを活かして個々の生徒にきめ細かい指導を行っている。

府立 M 高校は、通信制を併設した大規模な多部制高校である。SC が学校生活への適応支援を必要としている生徒を対象とするのに対して、SSW は特別支援を必要とする生徒やその家庭を対象としている。以前はどちらにも養護教諭が関わっていたので、両者の役割分担が不明確であった。そこで、それぞれを管轄する分掌の分離を徹底し、養護教諭は SSW との連携に専念できるようにした。

この学校は、通信制も含めた他の部の授業の併修が自由にできる。このため、個々の生徒の実情に合わせた履修登録ができる反面、担任にとっては制度が複雑で履修指導が難しい。加えて、担任と生徒、クラスの生徒同士が一緒に過ごす時間が短いため、それぞれの人間関係が希薄になりがちで、生徒の指導にも困難がある。そこで、履修の手引きや単位修得状況の点検表、ホームルーム活動で利用できる教材集を作成し、新任教員を含めたすべての担任が指導力を発揮できるようにしている。教材集は自己理解や進路学習だけでなく、自己管理や人間関係づくりなどもあり、生徒の実態に合ったものになっている。データは公開され、担任がクラスの実情に合わせて加工して使うことができる。

(4) 教職専門実習 II および III での成果

山形県立 K 高校は、全日制で生徒のほとんどを女子が占め、進学率が高く部活動も盛んである。この学校では保健課が中心になって、

- ・ 新入生オリエンテーションでの人間関係づくり
- ・ 学習と部活動の両立の支援
- ・ 健康や精神状態のアンケート調査の実施
- ・ アンケート結果のデータ化と教員への公表

など、特色ある取り組みを行っている。全校生徒の健康状態を把握している養護教諭の役割は大きく、支援体制を整え有効に機能させるうえで重要である。講話等の講師依頼や外部機関との連携も、養護教諭の人的ネットワークに頼ることが多い。一方で、学校の日常業務が増大しているため、支援が必要な生徒が現れたときの養護教諭や他の教員の負担は大きい。このため、支援が必要な生徒を出さない予防的措置が重要であることを職員がよく理解しており、全職員を挙げての取り組みがなされている。

3 実践と結果

(1) 支援・指導方法の共有

2015年度、筆者が現任校で最初に取り組んだことが、新任教員への生徒理解説明会の資料作成である。高校は学校によって生徒の実態が異なるため、新任教員の抱える不安は大きい。現任校は不登校経験者や何らかの支援を必要とする生徒が多いため、なおさらである。前年度の先進校視察で得た資料を参考に、筆者は生徒の実態とその対応方法を説明する資料を作成し、新任教員への説明会で実際に使用してもらった。さらに、二か月後新任教員にアンケート調査を行った。その結果、新任教員はちょっとした工夫や配慮が現任校の生徒に対して有効であり、今後とも指導していけるという手ごたえを感じていることがわかった。この意見を参考にして、資料のなかの工夫や配慮の仕方に関する記述を増やし、内容もより具体的な記述を充実させることになった。

「不登校生徒への指導のガイドライン」も作成し、職員研修会で配布された。これは欠席が多い生徒を欠席日数によって段階分けし、それぞれの段階での指導方法を具体的に記したものである。教職専門実習Ⅱでの実習校で使われていたものを参考にしたのだが、単位制である現任校は学校の仕組みがまったく異なるために、内容は独自のものになっている。欠席の多い生徒は1年生に多く、二人制を採っている1年生担任のうち、一人は新任者が務めることが多い。そのため、この資料も次年度から新任教員への説明会資料に加えられることになった。

(2) SST の実践

筆者は総合的な学習の時間（以下総合学習と称す）のなかで SST 講座を開設し、実践に取り組んだ。生徒の諸スキルを向上させ、授業や学校生活に役立てさせることが目的である。しかし、担当する時間帯の生徒は現任校のなかでも引っ込み思案な生徒が多く、指導に乗らないのではないかと、という不安が付きまとった。そのうえ、講座は学年の枠を越えて選択する仕組みになっているため、知らない者同士が二人組になって活動する場面が出てくる。筆者はこれまで SST を指導した経験はまったくなく、指導方法は手探りであり、不安は隠しようがなかった。そこで、自己理解、他者配慮、コミュニケーションスキルの習得、を柱とした指導案を考え、生徒の様子を見て内容を柔軟に

変えることにした。さらに、実用的で自分のためになりそうなトレーニングであると生徒が実感できるように、初対面の人と仲良くなる活動と授業や生活のなかの具体的な場面を想定した言語活動を取り入れ、生徒が最も苦手とする人前での発表の実施を最終目標とした。

この SST 講座に対して、生徒は予想以上に積極的に取り組み一定の成果をあげることができた。筆者は本県で SC を務める臨床心理士の伊藤牧氏が作成した高校生ライフスキル尺度⁵⁾の調査を、講座の実施前と後に実施した。その結果を比較してもらったところ、問題解決、客観思考、他者配慮で有意差があることがわかった。この2回の調査の間には3か月の時間の経過があり、これらのスキルの向上の要因がすべて講座の成果であると断定することはできない。しかし、参加者全員が分け隔てなく接し合えるようになり、予定された活動をすべて実施できたことは、生徒にとって大きな自信になったことは間違いない。最後に行った学習成果の発表は、全員が一人ずつ前に立って発表したものである。信頼関係のできた仲間内でのものとはいえ、大きな前進であった。今後は指導方法に改善を加えながら、他の教員にも指導法を伝達していきたい。



図 2. SST の様子
(教員によるモデリング 右が筆者)

学習成果の発表に使われた生徒の文章

私がこの講座を選んで良かったと思うことが三つあります。

一つ目は、今まで関わったことのない人と話せたことです。毎回グループが変わって、グループ内で協力したり、話し合いなどをしたりする機会があったので、話したことのない人と関わることができて嬉しかったです。

二つ目は、人見知りをちょっとでも改善できたことです。今までは話しかけてくれるのを待っているだけでしたが、この講座では自分から話しかけることができたので進歩できたと思います。

三つ目は、コミュニケーションについて深く考えることができたことです。相手の話の聞き方や断り方、説明の仕方など、今まで意識したことがありませんでした。(以下略)

(3) 総合学習の改善

総合学習で SST を実施できたことは、筆者にとって大きな自信になった。やり方を指導しモジュールステップで取り組ませれば、現任校の生徒も様々な活動ができることがわかったからである。同時に、総合学習が持つ可能性に改めて気づききっかけにもなった。現任校の生徒は学習に苦手意識を持つものが多く、学習面での自己有用感に乏しい。総合学習で成功体験を積ませることができれば、学習意欲の向上につながる可能性があるからだ。

現任校の総合学習は前後期に分かれ、それぞれ3～4 ある講座のなかから生徒が学年の枠を越えて選択する仕組みになっている。授業時間は4時間のまとめ取りを前後期に4回ずつ行う。講師は教員が務める。このため、教員が創意工夫をこらして生徒の実態に合った内容のものを実施できる反面、何をしたらよいかわからず戸惑う教員も出てくる。ここ数年、現任校では、講座内容を固定すべきか否か、発表の機会を設定できないか、他の教員の優れた実践を共有できないか、などの意見が出されつつも議論が進まずにいた。

そこで筆者は、総合学習を通じて生徒の学習意欲の喚起に努めている山形県立 S 高校を視察した。S 高校は全日制の普通高校で、生徒の多くは学校がある町の出身という地域に根差した学校である。総合学習は、約 20 ある講座のなかから学年の枠を越えて生徒が選択する。講座は体験学習が多く、講師は町の人が務め、謝礼については行政の支援を受けている。そのため、生徒の主体的な学びが促されるだけでなく、生徒と町とのつながりができ、生徒が町のことを知るきっかけになっている。講座の学習を終えた後には、ポスターや作品展示、実演などによる学習成果発表会がある。

いくつかある講座のなかから、学年の枠を越えて選択する仕組みは現任校と似ている。その反面、発表会を設定することで探究的な学びの形式を整えていること、予算の裏付けがあることで外部講師を依頼しやすいこと、などは現任校と大きく異なる点であった。

筆者は視察結果を基に改革案を作成し、職員研修会を行った。改革の要点は3点ある。一つ目は、講座内容を固定化しないかわりに、指導の観点の点検表を設けた新しい計画書式を採用することである。これによって、教員は創意工夫をこらした

指導や臨機応変な指導ができる一方、学習指導要領に基づいた指導の観点を常に意識することができる。二つ目は、学習成果発表会の開催である。現任校の講座の多くでは学習活動を振り返る時間は削られがちで、発表まで行うゆとりはない。そこで、講座のなかで振り返りまでは実施するようにし、発表は講座の代表者が行うのである。三つ目は、研究授業のなかに総合学習を加えることである。これによって、優れた実践を他の教員が共有できるだけでなく、授業内容や指導法の改善についても他の教員の協力を得られるようになる。これらのうち、教員から不安の声が上がったのが学習成果発表会の開催である。生徒に発表させるための指導が困難、というのがその理由であった。稚拙なものになってもよいのでやってみようという呼びかけと、発表会の運営方法を話し合うことで、時間はかかったが教員間の合意が形成されていった。これらの改革は、次年度から実施されることになった。



図 3. 職員研修会の様子
(教務課長による説明)

(4) 授業改善

2015 年度の後半、筆者は担当するある授業の授業改善に取り組んだ。この授業の選択者は所属部も学年も多様であるためまとまりがなく、そのせいか授業をしていても活気が感じられず、成績も振るわない生徒が多かった。授業改善に取り組むきっかけが二つあった。一つは、他校での実践報告である。山形県基礎学力向上事業での各校の報告で、多くの学校がアクティブ・ラーニング(以下 AL と称す)の導入などの授業改善に取り組んでおり、生徒が協同で学び合う姿勢に手ごたえを感じていることがわかった。もう一つは、その授業での体験にある。筆者が授業プリントの空欄に入れる語句の説明を始めてまもなく、ある生徒がもっと先にある箇所の質問をしてきたのである。講義を無視したその態度に、筆者は不快感がこみ上げた。しかし、筆者はその生徒のことをよく知って

おり、悪気がないことはわかっている。その生徒はプリントの空欄を埋めてしまわないと落ち着かないのである。

そこで、筆者は授業プリントの空欄補充は生徒に任せ、いくつかの要点のみを解説することにした。講義をする時間が短くなったので、初めは時間を持て余した。周りとは相談しても良いと伝えても、ほとんどの生徒は黙々と取り組むだけであった。しかし、意外にも生徒たちには好評であった。退屈する時間帯がない、というのがその理由であった。授業者としては、すべての語句を丁寧に説明することがわかりやすい授業だと考えてきたが、生徒たちは答えがわかる部分の説明を聞くのは退屈だったのである。やがて、筆者もこの指導法の改善方法がわかるようになってきた。空欄補充の時間は、一人で学習を進めることが苦手な生徒の指導にあてるようにした。プリントのなかに教科書を写すだけではできない問いを入れるようにし、裏面にはやりたい生徒だけが取り組みばよい発展的内容をつけることで、学力の高い生徒や早く終わった生徒が退屈しないようにした。この指導法が成績向上につながるかはまだわからないが、生徒が暇をもてあそぶ時間がなくなり、生徒からも好評である。今後検証を重ねながら、指導法の改善に努めたい。

4 考察

(1) 多様な生徒への対応

多様な生徒たちにいかに対応し生徒の適応感を高めていくかは、多部制高校の大きな課題である。その方策は三段階に分けられる。第一に、生徒情報を効率よく収集し、職員間でその情報を共有することがある。中学校から得られる情報は、そのまま高校で指導に役立てられるものが多い。中高連携シートは、簡潔に書くことができる統一された書式が用意されるべきである。得られた情報を新生生の担任がすぐに共有することができれば、入学前から指導に活かすことができる。日常生活から情報を得る手段としては、教員からの報告、生徒アンケート、保健室からの報告などがある。定通振興会(2012)によれば、生徒の相談相手は友人や家族で、相談相手がいない者も多い。教員やSCが相談相手になっていない現実がある。気軽に相談できる環境整備を進めるだけでなく、支援を必要としている生徒を見つけ出す努力が必要であ

る。得られた生徒情報の共有化の手段としては、現段階では定期的な情報交換会が最も有効である。校内ネットワークを活用して生徒情報を常時記述・閲覧できるシステムは、今後有効な手段となる可能性を持っている。

図4. 生徒情報を常時記述・閲覧できるシステム
(生徒のエピソードを記述 新潟県立M高校)

次に、支援や指導の方法を開発し共有することがある。新任教員に対して生徒理解説明会を行うことは、新任教員の不安を和らげるだけでなく、職員の共通理解を図るうえで重要な意味を持っている。職員研修会もまた、指導の幅を広げるだけでなく、指導方針を再確認する意味を持っている。研究指定校制度は、独自の指導方法を開発する絶好の機会である。取り組みや指導方法をデータ化することによって指導法の共有が容易になり、担当者が替わっても取り組みが継続しやすくなる。視察した新潟県の学校は、取り組みがシステム化されたことに加えて、現在のやり方がうまくいっているという自信を教員が共有していることが、取り組みを維持する大きな動機になっていると考えられる。

指導方法を開発し共有することの重要性は、キャリア教育や履修指導にも当てはまる。ホームルーム活動で活用できる教材集があれば、指導方針を一致させ、生徒への適切な指導をしやすくし、担任の負担を軽減させる効果が期待できる。一方、生徒の実情はクラスによって少しずつ異なる。データを公開し、自由に加工できる仕組みが有効である。全日制高校であれば、こうした試みは学年内で日常的に行われているかもしれない。しかし、多部制高校では職員の勤務時間が分かれていて協力関係が築きにくいいため、こうした方法が効果的

である。

履修指導は単位制高校独特の課題である。多部制高校は制度が複雑なうえ必履修漏れのような失敗は許されないため、担任にとって大きな負担となっている。履修の手引きや単位修得点検表の作成、履修ガイダンスの実施など、失敗を防ぎ負担を軽減させるシステムの構築が欠かせない。負担が軽減した分、担任は履修指導にじっくりと取り組むべきである。

最後に、学校の組織作りがある。専門知識を持つSCとSSWは、多部制高校に欠かせない人材である。SSWについては、今後急速に配置が進むことが見込まれる⁶⁾。福岡(2013)は、SSWによる効果的な支援とは、教員による指導、養護教諭による心理的なサポート、外部機関との調整などが総合的な支援として提供されることによるのであり、SSWが単独でなし得るものではないことを指摘している。これはSCに対してもそのまま当てはまることであろう。SCとSSWがその機能を十分に発揮し学校がチームとして機能するためには、家庭環境を含む生徒の情報を的確に収集・把握し、どの生徒を、どちらにつなぐのか、という業務を的確に行うコーディネーターが必要である。さらに、生徒の内面や家庭の微妙な問題を扱うだけに、コーディネーターとSCやSSWとの信頼関係の構築が欠かせない。

(2) 学習指導

学習に関しては、第一に、生徒の学ぶ意欲を喚起する工夫が不可欠である。その点において、総合学習は大きな可能性を持っている。総合学習では、生徒の実態や興味関心に応じた学習内容の設定でき、多様な学び方を提供できるうえ、定期試験による評価を必要としないため生徒の様々な活動成果を評価することができる。普段の授業では目立たない生徒や成績の低い生徒が活躍する場面も出てくることから、生徒の自尊感情や自己有用感を高め、学ぶ意欲を喚起する効果が期待できる。

次に、学習を支援する制度の整備がある。単位の付与は生徒の意欲に直結するため、多様な単位認定方法があることが望ましい。学び直しはニーズが大きいが、小中学校の学習内容を復習するだけでは、意欲が続かない生徒が出てきて限定的な効果に終わる可能性が高い。高校の授業内容や生活と関連付けて学ぶ意味が理解できるようにする、個別に指導する、などの工夫が必要である。わか

らないところを気軽に質問できる環境づくりも重要である。質問会場を作るだけでは質問に来ない生徒が多い。ありふれた方法だが、生徒を指名して集めるのも効果的である。

最後に、教科の授業の改革がある。教科の授業では、少人数授業や習熟度別授業、チームティーチングなどを導入することがすでに広く行われている。そのうえで、教科の授業においても、生徒の実態や興味関心に応じた学習内容の設定、多様な学び方の提供、生徒の様々な活動成果の評価が志向されるべきであろう。したがって、授業の指導法では、多様な指導法を併用・並行することが考えられる。ある方法では学びにくい生徒でも、別の方法ならば学びやすい可能性があるからだ。ALは一つの授業のなかにも多様な学びの局面があることから、成果が上がる可能性を持っている。(3) SSTの有効性

親しい友人を作ることは、学校生活を楽しく充実したものにする最大の要因となっている。しかし、現実には交友関係を築けない生徒も多い。クラスに友人を作れない生徒は、部活動や校外活動への参加も限定されている場合がほとんどで、豊かな人間関係を体験する機会に乏しい。学校行事は生徒の交友関係を広げるよい機会であるが、対人スキルが低ければその機会を活かすことができない。SSTは生徒の諸スキルを向上させるのに有効だけでなく、トレーニングに取り組む過程で友人関係が作られていく実用的な面を持っている。さらに、小林(2011)は、ソーシャルスキルの向上と豊かな人間関係の体験が不登校の防止や再登校の支援、その後の社会的な不適応の予防に重要である、と指摘しており、SSTの指導体制の拡充・充実が強く望まれる。

5 到達点と課題

多部制高校の現状と課題および個々の生徒が必要としている支援内容については、全国調査の結果などから一定程度明らかにすることができた。具体的な支援・指導方法については、先進校視察と教職専門実習から多くの指導事例を学ぶことができた。それらを基にして、筆者は現任校において、新任教員への説明会資料の充実、SSTの実施、総合学習の改善、授業改善などに取り組み、一定の成果を収めることができた。

課題はいくつかあるが、その最大のものは、総

合学習から教科の授業に到るカリキュラム改革である。そのうち、総合学習については改革の道筋をつけることができた。探究的な学びが更なる学びへの動機づけになること、人前で発表することが生徒の自信につながることを、さらに、発表会の成功が教員の達成感につながることを期待したい。

佐藤(2000)は、総合学習はカリキュラム改革の突破口であり、総合学習において創出された学びが教科学習の改革へ結びつく必要がある、と述べている。日々の授業は生徒にとって学校生活の大部分を占めるものであり、学力の向上は生徒のキャリア形成に大きく影響する。教科学習の改革こそ多部制高校改革の一つの到着点であろう。筆者の行った授業改善は、カリキュラム改革を志向したものではなく、その実態も協同的な学びや探究的な学びからはほど遠いものである。どうしたら協同的な学びや探究的な学びが促進されるのか、そもそも生徒が学ぶことの必要性を感じるのどのようなときなのか、残された課題は大きい。それでも、指導法を変えることによって、受け身だった生徒の授業態度が変わりつつあるという手ごたえがある。なにより、生徒からの授業評価が変わったことに筆者は希望を見出す。授業改善の取り組みを他の教員へも広げていく必要がある。そして、授業改善の取り組みは、勤務時間が異なるために教員同士の協力関係を築きにくい多部制高校において、教員同士の協力関係を強める大きな武器にもなり得るだろう。

注

- 1) 定時制高校と単位制高校の説明については、小関重紀(2015)「多部制高校の現状と課題並びに改革の展望―生徒の適応感を高め、社会的自立を促す指導―」、『山形大学大学院教育実践研究科年報』第6号を参照。
- 2) 前述 1) を参照。
- 3) 18 項目の質問に生徒が選択や記述によって回答するもので、毎年 12 月に卒業予定者全員に実施している。
- 4) 前述 1) を参照。
- 5) 37 項目の質問に生徒が6段階で回答するアンケート形式の調査。3～4 項目ずつ意思決定、問題解決、創造思考、客観思考、論理思考、関係性構築、他者配慮、自己認識、情動対処、ストレス対処の各スキルに対応している。

- 6) 定通振興会(2012)によれば、2011 年度の SC の配置率は 63%、SSW の配置率は 3%である。2015 年中央教育審議会は SSW と SC について、配置充実のため法令に位置づけ、将来的には全校配置も視野に入れた答申を行った。

引用文献

- 福間麻紀(2013)「高校におけるソーシャルワーカーの役割―取り組みの視点に関する考察―」、『教育福祉研究』第 19 号, p. 7
- 小林正幸(2011)「不登校」, 小林正幸・奥野誠一(編著)『ソーシャルスキルの視点から見た学校カウンセリング』, ナカニシヤ出版, pp. 138-139
- 三菱総合研究所(2012)『高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究』, p. 77
- 佐藤学(2000)『授業を変える 学校が変わる』, 小学館, pp. 158-160
- 全国定時制通信制教育振興会(1994)『定時制通信制教育ガイドブック』, pp. 30-41
- 全国定時制通信制教育振興会(2012)『高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究』, pp. 13-14, pp. 21-23, pp. 41-45

参考文献

- 上越生徒指導研究会(編著)(1991)『実践研究 個を生かす生徒指導』, 教育開発研究所
- 牧昌見(2008)『学校改善の実践と課題』, 教育開発研究所
- 村川雅弘(1999)『“実践に学ぶ” 特色ある学校づくり No. 2 「総合的な学習」編』, 教育開発研究所
- 中留武昭(監修)(2003)『生徒の自分探しを扶ける「総合的な学習の時間」』, 学事出版
- 中本克美(編著)(1996)『高等学校が変わる 実践に見る学校の個性化』, ぎょうせい
- 新潟県立堀之内高等学校(2014)『平成 25 年度特別支援教育に関する実践研究充実事業報告書』
- 新潟県立出雲崎高等学校(2010)『高等学校における発達障害支援モデル事業最終報告書』
- 新潟県立長岡明德高等学校(2012)『平成 23 年度特別支援教育総合推進事業報告書』
- 佐藤学(2012)『学校改革の哲学』, 東京大学出版会